

## 高山貴さんインタビュー

### ◆講演者紹介

これから講演してくださる人を紹介します。

高山貴さんは、1964年、ベトナム・ビエンホア省、現在のドンナイ省で生まれました。今年で58歳になります。

ベトナム名はCAO ĐÌNH QUÝ（カオ・ディン・クイ）さんです。

1979年、16歳の時、共産主義政権下のベトナムからボートで脱出し、2年後にインドシナ難民として日本への定住が許可されました。

育英高専、現在のサレジオ工業高等専門学校グラフィックデザイン科を卒業後、印刷業・写真製版会社に長年勤め、現在はフリーランスの司法通訳としてベトナム人の関わる事件の捜査の場で通訳をしています。

また仕事以外でも、カトリック教会に集う滞日ベトナム人の若者たちに“兄貴”として関わり続け、慕われています。

今、日本には世界中から大変多くの若い労働者が出稼ぎに来ています。

彼らの多くは、言語や文化・生活習慣の違い、厳しい労働環境、賃金や教育の格差など、さまざまな問題によって、とても苦しい生活を送っています。

高山さん自身、少年時代に共産主義政権の抑圧を逃れ、ボートピープルとしてベトナムから日本に渡り、温かな支援者に支えられながら幾多の困難を乗り越えてきました。

そして高山さんは今、外国から日本に来て助けを必要とする若者たちのために、耳を傾け、希望の光となって、若者たちと共に歩み続けています。

それでは、高山貴さんにインタビューしたビデオをどうぞご覧ください。

=====

## ◆インタビュー

### ◆ベトナムから日本に来られた経緯をお聞かせいただけますか？

1975年4月30日にサイゴンが陥落し、ベトナムは、北の共産主義政権によって統一されました。

南の軍や行政関係者、また宗教、特にカトリック教会は激しく弾圧されました。

家族は私たちの将来を考え、1979年10月末、16歳の私と兄・弟・姉夫婦は、48人の仲間とボートで国を出ました。

海に出て4日目に、日本に向かうノルウェー船に救助されました。

当時、日本は難民の定住を受け入れていなかったため、私たちのグループは全員、一時的な滞在の予定で、長崎県にある聖母の騎士のシスターの修道院に受け入れていただきました。

長崎で2年近く滞在する間に、日本で暮らす決心をしました。

1981年、日本政府はインドシナ難民の定住許可を閣議決定したのです。

勉強する機会を求めて東京に出て、仲間とアパートで生活を始めたところ、品川に国の難民支援施設である国際救援センターが開所し、そこに入所して日本語などを勉強しました。

センターには粕谷神父様が顧問としておられ、ミサがあり、勉強についての相談にも乗ってくれました。

私は住み込みで、日本語学校の奨学金が出る新聞配達をすることになりました。

その後、カトリック高円寺教会の皆さんの支援を受け、サレジオ会の学校である育英高専、現在のサレジオ高専に通い始めました。

当時、校長を務めておられたヘンドリックス神父様の面接を受け、1年間、聴講生として通った後、グラフィックデザイン科に入学させていただきました。

私のほかに7、8人のベトナム難民の若者が学んでいました。

助けてくださる方たちとの出会いがあり、こんなに恵まれていいのかな、と思うこともありました。

難民の若者の中には、全然恵まれない子もいたのです。

#### ◆サレジオ高専での思い出を聞かせていただけますか？

並木神父様と伏木神父様の倫理の授業がすごく好きでした。

友達もたくさんできて、文化祭も楽しかったです。卓球部に入っていました。

野尻湖のキャンプはとても楽しかったです。

夕暮れになって夕日を眺めるために栈橋に出ると、故郷を思い出してホームシックになり、泣いたのを覚えています。

#### ◆学校を卒業して、社会に出てからの話を聞かせていただけますか？

凸版印刷のファミリー会社に就職して、2年近く勤めました。

その後、同期の友人のお父さんが経営する写真製版会社に移り、25年ほど勤めました。

今は通訳の仕事をしています。

ここのところ、私たちの通うカトリック川口教会で、ベトナム人の若者と関わっています。

長く日本で暮らしてきた先輩として、今苦勞している彼らのために、こうしたほうがいいよとフォローしたり、悩みを受けとめたり、病気になれば一緒に病院に行くなどしています。

ここ7、8年で多くの留学生や技能実習生が日本に入ってきています。

教会で彼らに出会い、きっと彼らはいろんな心配を抱えているはず、と思ったのです。

そこで、私に与えられている使命のようなものを感じました。

毎週日曜日に集まってはお祈りして、わいわいおしゃべりして、何か悩みや心配を抱えている子がいれば、話を聴きます。

ボランティアというよりもまず、人間と人間の関わりです。

私は今年58歳になるので、彼らの父親の年齢ですが、兄貴のような存在になって、お互いに遠慮しないで話せるように心がけています。

どんどん彼らの中に入って、初対面でも話しかけて、「どこから来た?」「いま大変なことはない?」「生活はどう?」など、単純なことから話します。

◆日本にいるベトナム人の若者たちは、どのような悩みや問題を抱えているのでしょうか?

文化の違いなど、多様で複雑です。

技能実習生は仕事で、契約と違う内容だったり、厳しい圧力があったり、言葉の問題で意思疎通できず、お互い誤解する時もあります。

暴力を受けることもあります。私は彼らの話を聞いて、アドバイスをしています。川口教会のベトナム人のシスターは、病気になった若者、法律上の問題を抱えている若者、会社でひどい扱いを受けている若者たちの声を拾い上げて、弁護士や医者などの専門家につなげています。私はその活動をお手伝いしています。

卒業してから育英に恩返しが全くできていませんが、今、ヘンドリックス神父様がここにいらっしゃったら、「ありがとうございます、私は今、こういうことをやっています」と言いたいです。

#### ◆現在の通訳の仕事について教えてください。

東京の検察庁と、関東地方の各県警や地方検察庁から依頼されて、私はフリーランスで司法通訳の仕事をしています。

今6年目です。ベトナムの若者が日本に入ってくると、悲しいことですが、犯罪も発生しています。

私は被疑者になって逮捕されたベトナム人のため、警察から依頼が来ると出かけて行きます。

警察の取り調べは、彼らもつらく感じています。

心の動揺に気づいて安心させてあげることも、私の役目ではないかと思っています。

実際に、取り調べが進んでいくと、心細いのでしょうか。

表情が変わっていきます。

髪の毛が抜けてしまったり、顔がげっそりしたりします。

## ◆コロナウイルスのパンデミックによって、若者たちにどのような影響が生じていますか？

昨今では、外国人技能実習制度の下、多くのベトナムの若者が日本に来ています。しかし、日本に来るために、彼らは大きな借金を抱えていることが少なくありません。

この借金とは、技能実習生送り出し団体に支払うお金や渡航費用の他に、様々な経費がかかるからです。

その金額は100万円から150万円になります。

ベトナム国内のサラリーマンの基本給は、日本円に換算すると約3万円ですから、彼らにとって100万円はどれだけ大きいかわりに想像に難くありません。

加えて、近時のコロナ感染拡大の影響で仕事が減って、収入も少なくなっています。

なかには解雇される若者も少なくありません。

彼らにとって解雇は死に等しい意味を持ちます。

なぜなら、解雇されると無収入になることに加えて、それまで住んでいた住居を出なくてはなりません。

収入もなく、住む家もない彼らは、知り合いのベトナム人を頼りに転々とする生活を余儀なくされます。

なかには公園で寝泊まりする若者もいます。

空腹に耐えきれずに、スーパーでお弁当やおにぎりなどの食料を万引きして逮捕された若者もいます。

警察に逮捕されて所持品検査をされたところ、所持金はわずか数十円しか持っていない若者もいました。

これは私が実際に見た、あまりにも悲しすぎる現実です。

家族の経済的な状況を少しでも楽にさせてあげたい一心で、日本に技能実習に来たものの、コロナの感染拡大で状況が一変しています。

路上に彷徨う彼らに、一日も早く一閃の希望、救いの光が注がれることを祈っております。

#### ◆私たちはどのようにして、この困難を乗り越えることができますか？

この長引くコロナ禍に、耐え忍ぶことが困難な人であっても、耐え抜いていく強い気持ちを持ち続けることが出来るために必要なのは、私たち一人一人が互いに支え合ったり、励まし合ったりすることではないでしょうか。

#### ◆最後に、若い人たちへのメッセージをお願いします。

人と人の関わりを大事にしてほしいです。

仲間であっても、自分の知らない人であっても。

無関心ではちょっと困ります。本当に簡単なことなのですが。

できれば、この日本という国にもっと関心を持ってほしいと思います。

私は戦争を経験していますが、毎年、8月の広島、長崎、終戦記念日、あるいは東京裁判や沖縄について、テレビ番組があれば見えています。

戦争を経験していなくても、こういうことがあったと知り、戦争は絶対にやってはならないと知ってほしい。平和を絶対に大事にしてほしいです。

人と人とのつながりを大事にすることによって、自分も相手も平和になりますね。

本当に小さなことですが、それが集まって大きな力になります。

それを大事にして、皆一緒に平和な生活を送れるように願っています。

◆高山さん、人生の貴重な体験を私たちのために分かち合ってください、ありがとうございました。

---

---

12th Asia-Oceania (Online) Regional Congress of Don Bosco Past Pupils

June 25-26, 2021



### Talk 1: Hope and Actions for the Young People in need

**Mr. Takashi Takayama**

(Past pupil of the Salesian Polytechnic, Tokyo, Japan)

#### Introduction:

I' d like to introduce to you our speaker.

**Mr. Takashi Takayama** was born in 1964 in Bien Hoa (today Dong Nai) Province, Vietnam. He is 58 years old. His Vietnamese name is CAO ĐÌNH QUỶ.

Mr. Takayama escaped communist Vietnam on a boat in 1979. 2 years later, he was accepted as an Indochinese refugee by the Japanese government. He studied graph



ic design at the Salesian Polytechnic (at the time, Ikuei Polytechnic), after a long career in printing and photomechanical companies, he now works as a freelance judicial interpreter, interpreting for criminal investigation on cases involving Vietnamese persons. In his free time, he accompanies, as an ‘*Aniki* (Bro)’ , the Vietnamese youth who frequent his Catholic parish.

Today, many young workers from abroad come to Japan. Many of them experience difficulties in life, due to the new language, differences in culture or custom, as well as harsh working environments, inequity in payments and opportunities for education.

Mr. Takayama himself fled from the oppressive communist regime in his youth, arriving in Japan from Vietnam as one of the ‘Boat People’ . Helped by the support of warm-hearted people he met, he has overcome many challenges on the way.

Today, he journeys with the youth who have come to Japan and who need a helping hand, by listening to them, being a beacon of hope for them.

We present to you an interview with Mr. Takashi Takayama.

---

## **Interview:**

*Could you tell us how you arrived in Japan?*

After Saigon fell on April 30, 1975, Vietnam was unified by the northern communist regime. They launched a harsh persecution against military and administrative personnel of the former southern Vietnamese government. Religion also underwent severe persecution, especially the Catholic Church.

Our family, considering our future, decided to make us escape. So towards the end of October 1979, my older brother, younger brother, my sister, her husband, and myself - 16 years old at the time - we left on a boat with around 48 other people. After 4 days on the sea, we were rescued by a Norwegian ship bound for Japan. At that time, Japan was still closed and did not give residence permit to refugees, so we landed with a temporary permit and our whole group was accepted in a convent in Nagasaki, the convent of the Franciscan Sisters of the Knights of the Immaculate.

In the course of our stay there for nearly 2 years, we decided to stay in Japan. In 1981, the Japanese government had decided to accept Indochinese refugees as residents. Seeking opportunity to study, we moved to Tokyo and started to live with friends in an apartment when we learned that a center for refugees was opened in Shinagawa, Tokyo. We were accepted and were enrolled in the Japanese language course there. Although it was a state run center, a Catholic priest, Fr. Kasuya was there as a Supervisor. He celebrated mass for us and I could also seek his advice regarding my chances for studies.

Finishing the course at the center, I started to work as a live-in newspaper boy at a newspaper delivery shop, while studying at a Japanese language school on scholarship provided by the shop. Later, thanks to the assistance by the parish of Koenji Church, I could start my studies at the Ikuei Polytechnic (now Salesian Polytechnic).

I was interviewed by Fr. Hendrickx who was the Director of the school at the time and started the first year as an auditing student, then was enrolled in the graphic design course. At the Polytechnic, there were 7 to 8 Vietnamese refugee students other than myself. I used to sometimes wonder if I deserve to be so fortunat

e, having met people who generously help me, while so many refugee youths had to struggle so much in life.

*What do you remember about your school life?*

I really enjoyed the ethics class taught by Fr. Namiki and Fr. Fushiki. I made many friends and also enjoyed the school cultural festival. I joined the table tennis club. The camp at Lake Nojiri was so much fun. I remember when we went out on the pier to watch the sunset. My thoughts flying back home, I became homesick and cried.

*How was it for you after you graduating, going into the world?*

I worked for 2 years in an affiliate company of Toppan Printing Co., Ltd., then worked at a photoengraving company run by the father of a colleague for about 25 years. I am now working as an interpreter.

These days, I'm involved with Vietnamese young people who frequent our parish, Kawaguchi Church. As someone who has been there, living many years in Japan, I try to help these youths who are having difficulties, by giving advice, listening to them, accompanying them to the hospital when they get sick, etc. In the past 7 or 8 years, many students and technical trainees have been arriving in Japan, and seeing them at our parish, I supposed they must be experiencing various difficulties. I felt it was a mission given to me.

We gather every Sunday to pray, chat and share together, and if anyone has worries or is troubled, we listen to them. Rather than being 'volunteer work', it's first of all, human relationship.

I'm 58 years old, the same generation as their fathers, but I try to be like a brother to them, so they won't have to speak in polite form, and will feel free to speak their minds. I actively mingle with them, starting up conversation also with those I meet for the first time, beginning with simple questions like, "Where are you from?", "Is everything alright at the moment?", "How's life?"

### *What are the difficulties or problems that the Vietnamese youth face in Japan?*

The difficulties, cultural differences and others are various and complex. For the technical trainees, there can be problems at work, they are sometimes forced to do work that had not been in the contract, receive undue pressure, or there could be misunderstandings due to difficulty in communication, with the language barrier. There are even cases of physical abuse. I listen to them and give advice. A Vietnamese religious sister at Kawaguchi Church is helping the youth. When they become sick, when they are entangled in legal problems, or when they are badly treated at work, referring them to specialists, lawyers, doctors, etc. I assist her in this work.

I haven't been able to give back anything to my alma mater, the Salesian Polytechnic, but if Fr. Hendrickx were here now, I would like to say to him, "Thank you Father, this is what I'm doing now."

### *Tell us about your present occupation as an interpreter.*

I'm a freelance judicial interpreter working for the Tokyo Metropolitan Police Department, prefectural police forces in the Kanto region around Tokyo, as well as for District Prosecutors' Offices

It's been 6 years now. It's a sad reality, but with the arrival of Vietnamese youth, some of them get entangled in criminal activity. When a Vietnamese is arrested as a suspect, I'm asked by the police to assist them.

The interrogation by the police can be really harrowing for them. I feel it's also my role to understand the turbulence they are going through, so as to try and reassure them. Actually, they must be experiencing so much fear, because their countenance changes as the interrogation goes on. Some lose their hair, some of them get hollow-cheeked.

*Could you share with us how the covid-19 pandemic is affecting the young people?*

In recent years, under the 'foreigner training system', many Vietnamese youth have been arriving in Japan. In many cases, the young people had taken on a huge debt in order to come to Japan. They need money to pay commission to the brokers who send out the trainees, for the transport fee and various other expenses. It could amount to 1 to 1.5 million yen. The base salary in Vietnam is the equivalent of 30,000 (thirty thousand) yen, so you can easily imagine what a huge amount 1 million yen is for them.

Moreover, the recent situation of the pandemic has led to diminishing of work and less income. Many young people have been laid-off from work. Losing their jobs can be like a death sentence for them. As well as losing the source of income, they have to leave the housing that they had stayed in.

Without any income and without a place to stay, they are forced to depend on and stay with their friends, hopping from one place to another. Some of them end up sleeping in parks. Some have been arrested for shop-lifting 'bento' (lunch pack) or 'onigiri' (rice balls) out of sheer hunger. Some of them had only a few 10 y

en coins on them when the police searched their belongings. These cases that are so sad, I actually witnessed myself.

They came to work as a trainee in Japan, only wishing to relieve their family of economic hardship, but everything has turned upside down in the pandemic of covid-19. I pray that, as soon as possible, a ray of hope, light of relief will shine on these young people who wander in the streets.

*How do you think we can overcome this crisis?*

It's difficult to endure hard times, but I think we all need to support and encourage one another in order to see ourselves through this prolonged crisis, and to be resilient.

*Do you have a message for young people?*

I'd like to encourage them to cherish human relationships. Whether the person is a friend in your circle or a stranger to you, it's not good if you are indifferent towards that person. It's really a simple thing.

I hope the young people would become more interested in the history of their own country, history of Japan. I myself have experienced war, and every year, in August, I remember and try to follow documentaries on TV on Hiroshima, Nagasaki, anniversary of Japan's surrender and end of war, or about the Tokyo war crimes tribunal, about Okinawa. Even if the youth have never experienced war, I wish that they come to know what had happened in the past and learn that we must never allow war to happen again. My wish is that they absolutely support peace.

By cherishing relationships, both you yourself and the other person will experience peace. It may be a very small act, but when gathered together, these small a

cts become a great force. My hope is that we value these relationships, so we can live in peace together.

*Takayama-san, thank you very much for sharing your precious life experience with u*

*s!*